

整体師は

クリ責めして

中絶  
連続絶頂

いい子な梓を潰して待つ

R18 執着攻め 施術台

整体師は毎晩通う敏感な常連を執  
着でクリ責めして連続絶頂させ中  
出しする

R18

2026・9・17

# 目次

## 本文

残業を抜けて、白咲萌はいつもの路地を歩いた。肩と腰が、また重い。総務の仕事は座りっぱなしで、帰るところには首の後ろがパンと張る。

角を曲がると、小さな看板が見えた。『蒼井整体』。ガラス戸の向こうは、いつもより明かりが残っていた。

「萌さん、お待ちしてた」

ドアを開けると、蒼井涼が笑っていた。黒い施術着に、大きな手。受付の予約表が、半分だけ開いていた。六時の枠に、白咲萌の名前だけ。他の行は、消されている。

「……今日、他の人、入ってないの？」

「入れてない。……君の枠、空けたかったから。他は断った」

受付の予約表を見て、萌は八回目の来店だと分かった。初めて来たのは、肩が痛くてたまらなかった三月のこと。あれから週に一度、ここに足が向くようになった。いつの間にか、彼の予定は、自分の周りに寄せられていた。

「今日も、お疲れさま。……顔色、少し悪いね」

「だって……今日、ずっと資料まとめたから」

涼の声は柔らかい。でも、萌の顔を見る目が、じっと長い。背が高く、肩も広い。萌が一步入ると、彼の影にすっぽり入るみたいに感じる。

「着替え、用意してあるよ。今日は腰も、しっかり見せて」

施術着に着替え、施術室へ入った。布の匂いと、ほんのり甘いオイルの匂い。萌は仰向けの台に寝かされ、タオルが腰にかけられた。

「肩からいくね。……力、入れすぎないから」

大きな手が、首の後ろに落ちた。指先が硬い筋をほぐす。痛みと一緒に、じわっと楽になる。萌は目を閉じた。

「ここ、いつも固い。仕事、大変なんだ」

「うん……最近、残業多いの」

「ここ、前回より硬い。……覚えてる。君が固まる前の、呼吸」

手が肩から背中へ下り、腰の横に回った。前回の施術の手触りが、肌に残っているみたい

に、萌の背筋が反応した。いつもより、内側に寄っている。萌の太ももの付け根が、ちりちりと熱くなった。

「腰、今日も張ってる。骨盤、少し動かすね」

「骨盤……って、そんなに？」

「デスクワークだと、骨盤が後ろに倒れやすいんだ。……膝、外して」

涼の体が、台の横に寄った。萌の腰の上に、彼の手のひらが重なる。大きい。萌の腰全体を、片手で包み込むみたいに。

「んっ……」

「痛い？ それとも、ここ？」

手が、少し下がった。タオルの端の、もっと内側。萌の息が、ひっくり返る。

「そこは……施術、じゃないよね……」

「張ってるから。……ここも、ほぐした方がいい」

涼は俯いた。耳元が、近い。

「萌さん、前にも言ったけど……君の体、覚えやすいんだ。どこが硬いか、すぐわかる」

「覚え……てる、の？」

「うん。……声も」

萌の頬が、じわっと赤くなった。涼の指が、タオルの上から、腰のくびれをなぞった。ゆっくり、内ももに近づく。

「ここ、開いちゃうの、恥ずかしいですよ。……でも、ほぐすには、力抜かないと」

「や、だ……脚、勝手に……」

萌の膝が、少し外側に開いた。涼の手が、その隙間に入る。施術着の股の縫い目が、指先に引っかかる。萌は胸の鼓動が、耳の奥まで響くのを感じた。整体に来るたび、彼の手は少しずつ内側へ入ってきていた。今日は、その線を越える気配があった。

「萌さん、前の回もここ、固かった。……そのときの声、まだ覚えてる」

「覚えてる、って……何の声……っ」

「こうやって、指が入ったときの。……小さく、震えた声」

涼の低い声が、首筋に落ちた。萌の肌が、粟立った。

「施術着、上までめくってもいい？ ……皮膚に直接触れた方が、早く楽になる」

萌は唇を噛んだ。八回目だ。これまでも、  
際どいところはあった。でも今夜は、涼の目が  
違う。

「……うん。……お願い」

小さな声。涼はそれを聞き逃さなかった。

「いい子だね」

施術着が、腰までめくり上げられた。冷たい空気が、お腹の皮膚を撫でる。萌はタオルで胸を隠したまま、脚を閉じようとして、涼の膝に阻まれた。

「力、抜いて。……僕に任せて」

彼の膝が、萌の太ももの外側を押さえる。体格差で、逃げ場がない。萌は震えた。怖いわけじゃない。恥ずかしくて、それなのに、腰の奥がじんわり濡れ始めている。

「ここ、張ってるね」

指先が、パンツの上から、股の縫い目をなぞった。萌は腰を跳ねさせた。

「ひゃっ♡ そこ、っ……！」

「敏感なんだ。……前から、気づいてた」

「気づいて……た、のに、言わないで……っ♡」

「言わない方が、いい？ それとも、もっと聞きたい？」

涼の指が、縫い目の上で、小さく円を描いた。萌の呼吸が、すぐに乱れる。

「んっ♡ あっ♡ そこ、じんじんする……っ♡」

「いい声。……もっと聞かせて」

指が、布越しにクリの形をなぞる。一回、  
また一回。萌の腰が、勝手に浮いた。

「やっ♡ 腰、動く……止まんないっ♡」

「動いていいよ。……僕の手の上で、いい子  
みたいに」

涼は速度を上げた。くちゅ、と湿った音が、小さく響く。萌は顔を背け、涙目になった。施術室の灯りが、涙でにじむ。彼の体が覆いかぶさるみたいに近く、大きな胸板が視界の端に入った。小柄な萌は、台の上で彼の手のひらひとつで押さえつけられているみたいに感じる。

「あっ♡ あっ♡ そこっ♡ そこだけ……  
っ♡」

「そこだけ、って言ったね。……言ったこと、覚えてる子だ」

「ここだけ？　じゃあ、ここだけ、可愛がるね」

指先が、一点に集中した。萌の脚がびくんと跳ね、内ももが震える。

「いやっ♡　施術台、きしむ……っ♡　八回目、なのに……っ♡」

「イク？　……イっていいよ。僕の前で」

「だめっ♡　だめなのにっ♡　指、止ままない……っ♡」

腰が弓なりに反り、萌の中がぎゅっと締まった。頭の中が真っ白で、足先まで痺れる。一度目の絶頂が、施術台の上で芯ごと跳ね切れた。

「はぁっ♡　はぁっ♡　……やば……っ♡」

「一回、イったね。……でも、まだ張ってる」

「まだ……？ もう、無理……っ♡」

「無理じゃない。萌さんの体、わかってるから」

涼は休ませず、濡れた布の上でまた円を描いた。萌は泣きそうな声を上げた。

「ひっ♡ 敏感すぎ……っ♡ さっきの、まだ……っ♡」

「そのまま、もう一回。……声、止めないで」

指が、速く、浅く、執拗に。萌の爪が、施術台の布を掴む。

「あっ♡ あっ♡ またっ♡ 台の布、掴めない……っ♡ んあっ♡」

二回目は、もっと短い。腰が跳ね、腹筋が痙攣する。萌は涼の名前を、初めて喘ぎの途中で漏らした。

「りょ、う……さんっ♡ もう……っ♡」

「うん。……僕だよ」

涼は手を止め、濡れた指先を萌の太ももにそっと置いた。余韻で、萌の体が小刻みに震え続ける。

「……すごい。八回目で、こんなに反応してくれるなんて」

「八回目……って、覚えてたの……」

「全部覚えてる。いつ来るか、どこが硬いか、……どんな声を出すか」

涼は俯き、萌の汗ばんだ額に、唇を近づけた。触れはしない。近いだけ。

「君のこと、毎晩思ってる。……施術の時間が、一番長く感じる」

萌の胸が、どきんと鳴った。怖い。でも、嫌じゃない。執着、なんて言われたら、逃げるはずなのに。

「……変なこと、言うなよ」

「変じゃない。……本当のこと」

涼はタオルを直し、施術着を下ろしてくれた。萌はまだ脚が震え、立てない。

「来週の同じ曜日、もう入れてある。……六時、君だけ」

「もう、入れて……ある？」

「うん。……聞かずに入れたの、怒る？」

萌は、小さく頷いた。怒れなかった。

「……うん。……六時で、いい」

「ありがとう。……いい子」

涼の手が、萌の髪を一度だけ撫でた。大きな手のひらが、頭全体を包む。

着替えのとき、涼は何も言わず、背中のタオルを押さえてくれた。その手の温かさが、さっきの指先と重なって、萌の膝がまた少し震えた。

「今日は、来てくれてありがとう。……遠回りしないで、気をつけて帰ってね」

「……うん。あなたも、お疲れさま」

言い終えて、自分がなんて呼び方をしたか気づいて、萌は慌てた。涼は目を細めて笑うだけだった。

帰り路、夜風が熱い頬を冷ます。萌はパンツの中が、まだ濡れたままだと知っていた。肩

の張りは、確かに少し楽になっている。それなのに、腰の奥だけが、またじんわり疼き始めていた。

電車の窓に映った自分の顔は、いつもより色っぽく見えた。八回目の夜。整体に通う理由が、肩こりだけじゃなくなった。萌は、それをまだ口には出さなかった。来週、また同じ曜日に来ると約束した手のひらが、小さく焼きついていた。

スマホの画面に、未読が三本残っていた。

『今夜、閉店後に来れる？ 誰もいないから、ゆっくり触れる』

『七時以降の予約、後ろにずらした。君だけの時間』

『来なくても、鍵は回さない。……でも、来るって分かってる』

送信者は、蒼井涼。先週、施術台の上で二度イカされたあの閉店後から、しばらく経っていた。萌は画面を何度も開いて、閉じた。閉店後は、ばれたら終わりだ。整体院なのに、あんなことしたのに、また行くなんて。それに、予約をずらして待つなんて、普通じゃない。

それでも、二十時を過ぎた路地を歩いていた。看板の明かりは消え、施術室の奥だけ、薄い灯りが漏れている。近所の人に見られたら、どう説明する。整体の予約じゃない。来ちゃいけない時間に、来ちゃいけない理由で、足が向いた。

スマホを握りしめ、萌は深呼吸した。中に入れば、もう戻れない気がした。それでも指が、ガラス戸を二回ノックした。

「……萌さん」

鍵が回り、ドアが開く。涼は施術着のまま、周りを見てから萌の手を引いた。すぐに鍵が、またかかった。

「来てくれた」

「……来ちゃった。バカみたい」

「バカじゃない。……七時以降、予約ゼロにした。君が来るまで、誰も入れない」

「予約、ずらしたの……？」

「ずらした。……君の声、他の客の前じゃ聞けない」

施術室は、昼間より暗い。天井の灯りは半分だけ。影が濃く、施術台が白く浮かんでいた。いつものオイルの匂いに、閉まった空気のぬるさが混じる。

「今日は、予約じゃないのに……こんな時間、危ないでしょ」

「危ないのは、僕も同じ。……でも、君に会いたかった。仕事のふりは、もうしたくない」

萌の喉が、きゅっと詰まった。涼の目が、施術師の笑顔じゃなくなっている。

「着替え、しなくていい。……上だけ、脱いで」

「脱ぐ、って……」

「僕に触れさせて。……今日は、そういう約束で来たんでしょ」

萌は唇を噛み、ブラウスのボタンを外した。スカートは履いたまま、仰向けの台に寝かされる。タオルは胸にだけ。脚は、スカートのまま開かされた。

「ここ、前より濡れやすくなってる。……僕の指のせい？」

「言わないで……っ」

「言われたら、恥ずかしい？ ……じゃあ、触って確かめる」

涼の指が、パンツの上を、縦に滑った。上から下、下から上。円じゃない。一本の線で、クリの形をなぞる。

「んっ♡ あっ♡ そっ……そんな動き……っ♡」

「前は、くるくる回した。……今日は、違うでしょ」

「違う、のに……っ♡ なんで、効くの……っ♡」

指が、縦に速くなった。萌の腰が跳ね、スカートの裾が丸まる。

「あっ♡ 待って……っ♡ 速い……っ♡」

突然、指が止まった。萌の腰が、空いた分だけ浮いて、かすかな声を漏らす。

「……っ！？」

「焦らすよ。……君、すぐ甘い声出すから。止めたら、ここがひくひくするの、分かる？」

「分かる、から……っ♡ 触って……っ♡」

「触るのは、僕だけでいい？」

「……うん。……今は、あなただけ」

頷きを見て、涼の唇がほんの少しだけ緩んだ。施術師の仮面が、また薄くなる。

「ひどい……っ♡ やめて、じゃなくて……  
続けて……っ♡」

「続けるの？ ……誰にも見られないから、  
いいの？」

「……うん。……今だけ、いい」

小さな肯定。涼はパンツの縁に指を入れ、布を横にずらした。直接、熱い肉に触れる。萌の脚がびくんと閉じかけて、彼の肩で押さえられた。

「開いて。……逃げないで」

「開く、から……っ♡」

指先が、クリの上を、また縦に撫でた。ぬるぬるした感触が、電気みたいに走る。

「ひゃうっ♡ 直接……っ♡ さっきより……っ♡」

「前は布の上だった。……今日は、ここ全部、僕のもの」

「もの、なんて……っ♡ 言わないで……っ♡」

「嘘でしょ。……脚、もっと開いてる」

指が、上下に、浅く、速く動いて、三秒だけ止まり、また動き出す。萌の腹筋が痙攣した。

「あっ♡ あっ♡ また止まった……っ♡ いじわる……っ♡」

「我慢できない顔、好き。……萌さんだけ、こなる」

今度は長く、粘るように上下。水音が、静かな部屋に響く。萌は口元を手で押さえ、声を漏らした。

「んあっ♡ んあっ♡ 閉店後、なのに……っ♡ 鍵、かかった……っ♡」

「イク？ ……もう、遅い」

「遅い、って……っ♡ 触って……っ♡ 止  
めないで……っ♡」

「止めない。……僕が決める」

「りょう、さん……っ♡ お願い……っ♡」

「名前を呼んだから、イっていい」

言葉を聞いた瞬間、指が一気に速くなった。上下、上下、止まらない。萌の視界が真っ白に潰れ、喉から悲鳴みたいな喘ぎが溢れる。

「ああっ♡ ああっ♡ イくっ♡ イくっ♡  
んんっ♡」

名前を聞いた直後、一度だけ、腰が跳ね上がった。脚が震え、パンツの糸が指に巻きつく。止まらない。波が、小さく返って、また大

きくなる。萌は涼の腕を掴み、爪が袖に食い込んだ。

「りょうさんっ♡ りょうさんっ♡ まだ……っ♡ 止まんない……っ♡」

「止まらなくていい。……全部、出し切れ」

指は、一度も離さない。上下に動かし、一瞬止めて、また上下する。絶頂の余韻の中で、二度目の山が、勝手に押し上げてくる。萌の涙が、横目からこぼれた。

「やっ♡ やっ♡ おかしい……っ♡ 一回のあと、また……っ♡」

「声、上げていい。……外、誰もいない」

「誰も、いないから……っ♡ 聞こえる……っ♡ 予約、ずらしたのに……っ♡」

頭の奥まで痺れて、体がぐったりと弛んだ。一度の絶頂が、長く続いたあと、小刻みに震え続ける。萌は名を連呼したまま、台の布を握りしめていた。

涼は指を離し、パンツを直した。濡れた指を、タオルで拭わず、萌の頬にそっと触れた。

「来てくれて、ありがとう。……仕事じゃなく、君に触れたかった。本音」

「……分かった。来るときから」

「分かってて来たんだ。……じゃあ、次はもっと危ない場所でも来る？」

「危ない場所……？」

「君の家。……誰にも邪魔されない。……中まで、僕だけが触れる場所に」

萌の心臓が、また速く鳴った。中まで、という言葉が、腰の奥を疼かせた。答えられない。でも、首は横には振れなかった。

「……考える、から」

「うん。……無理に言わない」

涼は灯りを少し明るくし、施術室のドアへ向かった。鍵を開ける音が、かちりと響いた。冷たい夜気が、ほんの少し入ってくる。

「外まで送る。……足、まだ震えてるでしょ」

「見ないでよ……」

「見るよ。……歩く姿も、全部」

路地を二人で歩く。人影はない。萌は彼の一步後ろにつき、熱い頬を俯けた。夜風が脚の内側を冷やすのに、奥はまだ熱い。涼の歩幅に

合わせるたび、さっきの指の動きが思い出されて、膝がまた軟らかくなる。

「足、大丈夫？」

「いい、から……自分で歩ける」

「嘘。……さっき、震えてた」

涼の手が、言うより先に肘を取った。大きい。萌は振り払わず、そのまま歩いた。整体院の鍵が、またかかる音が背中に落ちた。

「今日のこと、誰にも言わないでね」

「言わない。……君も」

「言わない。……萌さんの声だけ、僕が持ってる」

駅前で立ち止まり、涼は深く一礼した。営業中の丁寧な整体師の顔に、一瞬戻る。萌は小さく手を振り、改札へ入った。

電車の中で、パンツの中がまた湿っていると分かった。閉店後の施術室。鍵の音。直接触れた指。次は、自宅。

肩こりのための通院だったはずなのに、萌はもう、嘘がつけなくなっていた。

奥付

作品名 整体師は毎晩通う敏感な常連を執着で  
クリ責めして連続絶頂させ中出しする

サークル いい子指導室♡

発行日 2026・9・17

レーティング R18